特集 ホテル・旅館の歴史に見る交流機能と文化表現の変遷

宿屋とヨーロッパ文明

宇都宮大学教育学部教授 下田 淳

1

宿屋とヨーロッパ文明を結びつけるなんて、少し大げさなタイトルと思われるだろう。宿屋というとなんとなく貧相なイメージである。ホテルといえば文明と似合うだろうか。ホテル（フランス語のオテル）はもともと宿屋の意であった。一九世紀以降になると豪華で高価な宿泊施設の代名詞として世界中で使用されるようになり、近代ヨーロッパ文明の象徴となった。ヨーロッパでも、庶民は二〇世紀後半になるまでめったに宿泊できなかった。今では貧相なホテルも多いが。

宿屋と居酒屋

それでは庶民はどこに宿泊したのか。ヨーロッパの庶民が旅行（観光）を本格的に楽しめるようになったのは二〇世紀以降である。だから庶民には旅先の宿泊施設などほとんど必要なかった。ただ庶民も、商売や巡礼などで遠出することもあったから宿泊施設と無縁であったとはいえない。

イギリスでは一二世紀ころに成立したインと呼ばれた宿屋があった。フランスではオーベルジュ（あるいはオテル）、ドイツではガストハウスなどと呼ばれた。ヨーロッパの宿屋は居酒屋を兼ねていた。居酒屋はイギリスのエールハウス（注1）を代表に諸国でさまざまな呼び方があったが、一般に一階が飲食・賭け事（テーブル）・ピン倒しゲーム・演芸の場などとなっており、二階に客は泊まった。だから居酒屋も宿屋であった。あるいは宿屋が居酒屋であった。この二つに基本的にそんなに差はない。どちらをメーンにするかで呼び名が変わっただけである。ここでは宿屋で統一して話を進める。ヨーロッパの都市に宿屋が成立するのは一二～一三世紀ころ、農村では一六世紀以降のことである（図版1）。

旅人は、宿の食事や住民との交流を通じて地域の食文化や住民の考え方を理解し、
また、滞在を通じて寝床や入浴の習慣などの生活文化を吸収できました。
住民は、旅人との触れ合いを通じて外の世界の異文化を吸収することができました。
それまでは安全な寝床と腹いっぱいの食事を提供するだけだった宿屋は、交流の場、文化体験の場として
付加価値を獲得し、近代のホテル・旅館が成立しました。その役割は社会環境により大きく変化しつつあります。
本特集では、ホテル・旅館の歴史の変遷をたどることにより、今後の宿泊施設の在り方を考えます。

いろいろな機能を担ってきた教会

ヨーロッパの教会は、もともと宗教以外にもさまざまな機能を果たしていたことを確認しておきたい。

宿屋としての教会

宿屋がなかった時代あるいは宿屋がなかった地域で、宿屋の機能を引き受けたのが教会や修道院、あるいは教会（または都市）が設立した救貧院であった。いわゆる聖なる施設が、無償で人々を泊め、飲食させ、貧者や病人を看病した。キリスト教の慈善行為として認識されていた。教会や修道院が金銭を取って客を泊めたという記録はあまりない。だから有償接待の宿屋とは異なる。

図版1　15世紀の宿屋のスケッチ。19世紀後半に描かれた印刷物。Über Land und Meer, 1887-88/III.（Fränkisches Freilandmuseum Bad Windsheim）

コミュニケーションセンターとしての教会

教会は礼拝の場であると同時に俗的世界の場でもあった。町や村のさまざまな規則を決める集会の場、商取引の場（市場）、知人とおしゃべりして暇つぶしする場、子供たちの遊び場、領主による裁判の場、職人の仕事場、芸人が芸を披露する演芸場、乞食の物乞いの場（これは本来教会の機能でもあるが）であった。また、祭りや冠婚葬祭時には酒を飲んで大騒ぎをする宴会場であった。要するに地域共同体のコミュニケーションセンターであった。共同体の大きな建物は、特に農村では教会ぐらいだった。だから、あらゆることをそこで行った。

銀行としての教会

貨幣経済が発展すると教会は貸し付けも行った。いわゆる銀行である。利子を取る場合もあった。キリスト教会は元来利子を取る行為を認めなかったが、実際は在地の多くの教会は利子付き貸し付けを行っていた。要するに、聖なる空間に世俗の世界が持ち込まれていた。聖俗は混淆（こんこう）していた。これはどの文明圏でも見られた現象であった。

聖なる場所としての教会へ

聖俗混淆した宗教施設への批判は、すでに一二世紀ころから存在していた。その批判を決定的にしたのが一六世紀前半の宗教改革であった。

ルターやカルヴァンは、教会（あるいは礼拝空間・時間）を、純粋に礼拝だけの場と時に変えようと努力した。礼拝空間・時間に、世俗世界の「不純物」を混入させないよう努めた。カトリックの改革（トリエント公会議（注2））も同様の論理を採った。宗教改革の最大の成果は聖的世界から俗的世界を分離させる試みであった。これを「聖俗の棲（す）み分け」と呼ぼう。聖なるものは聖なる場所へ、俗なることは俗的世界へそれぞれ棲み分けさせるのである。聖とは正統な教義に基づく礼拝、典礼、祈り。俗はそれ以外のあらゆることを指す。

教会から宿屋への俗的機能の移行

聖なる空間あるいは時間から分離された俗的部分はどこへ行ったのだろうか。俗的部分が移った場所の一つが宿屋である。特に農村では宿屋が俗的部分の多くを引き受けた。

前述のとおり宿屋は一二～一三世紀から存在していたが、一六世紀の宗教改革をきっかけに激増した。ヨーロッパでは、一六世紀以降、都市だけではなく農村にも必ず宿屋が成立したのは「聖俗棲み分け」の結果である。冠婚葬祭の宴、集会、商取引、芸人の活動、医療行為、裁判など、かつて教会で行われていた行為が宿屋にその場を移した。

都市と農村部における宿屋の機能分化

都市では、すでに一三世紀以降、市庁舎など公的建物が建てられるようになったので、集会や裁判などの場としての宿屋を必要とはしなかった。しかし、農村部では、集会や裁判の場として、封建制が解体されるまで宿屋が使われた。宿屋の引き受けた俗的機能の一つに金融業がある。これには少し説明が必要である。都市では、すでに一三世紀後半のイタリアで専属の銀行業が登場していたので、宿屋だけがその機能を引き受けたわけではなかった。

農村部では、貨幣経済の本格的な浸透が一六世紀以降なので、先述のとおり教会が金貸しを行うようになったと同時に、その機能が徐々に宿屋に移っていく。専門的職業としての銀行が農村に浸透し、宿屋から棲み分けしていくのは一九世紀の資本主義社会に入ってからである。こうして教会で行われていた俗的機能のいくつかは、都市では、宿屋を経由せずに、それぞれ専属の場所が成立し、そこで行われるようになった。それに対して、農村では教会の俗的機能を宿屋が丸ごと引き受けた感がある。

コミュニティーセンターとしての宿屋

だから、農村の宿屋は、教会に代わって共同体のコミュニティーセンターとなっていった。イギリスで居酒屋や宿屋がパブリックハウス（現在のパブの語源）と呼ばれるようになったのは、そのことを象徴している。とはいっても、教会から宿屋への俗的機能の移行は徐々に進行したから、両者は、しばらく農村共同体の二つの中心地として共存した。この宿屋が、資本主義の成立に絡んでいたといったら、冗談もほどほどにせよと怒られそうであるが、続けよう。

資本主義って何？

資本主義は、通常、封建制が崩壊し、誰もが自由に職業を選択し自由に商売できるようになり、いわゆる「産業革命」による大量生産・大量消費の一九世紀以降の現象と見なされる。しかし、資本主義を、「ある社会あるいはある文明下のあらゆる人間が貨幣を媒介として日常的に売買関係を結ぶシステム」と定義してみると、こういった社会は、すでに、一七世紀ころのヨーロッパに出現していた。私はこれを「貨幣関係のネットワーク」と呼んでいる。

貨幣を媒介とした農村と都市の関係

貨幣関係のネットワークは、古代からどの文明圏でも都市部では展開されていた。しかし、これが農村を含む文明圏一律に生じたのはヨーロッパの一七世紀以降の現象であった。なぜヨーロッパなのか？　農村にまで貨幣関係のネットワークが成立する前提は、ある文明圏内に局地的市場が多く、それに関わる多くの人々

が存在し、そこから富（貨幣）を農村にまで持ち込めるチャンスが多いことである。詳細は省くが（五月刊行予定の『ヨーロッパ文明の正体』筑摩選書で詳述する）、これが存在したのがヨーロッパであった。さらに重要な前提がある。農村にいわゆる農民以外に、農業に従事しない職業、例えば鍛冶屋や織物屋など、日用品を扱う職人（手工業者）や商人が居住していることである。こうなると、農民は、例えば鍛冶屋、織物屋あるいはパン屋が作った農具、衣服、食料品を商品として貨幣で買うような関係が成立しやすい。また、農村商人は、農民の生産物を都市市場に運び、それを貨幣に換え、農村に貨幣をもたらす役割を持つ。このような農村での農業従事者と各種手工業者や商人が分化して、彼ら相互の売買（交換）関係の成立した状態（最初は物々交換でもよい）を、農村内分業と呼んでおこう。

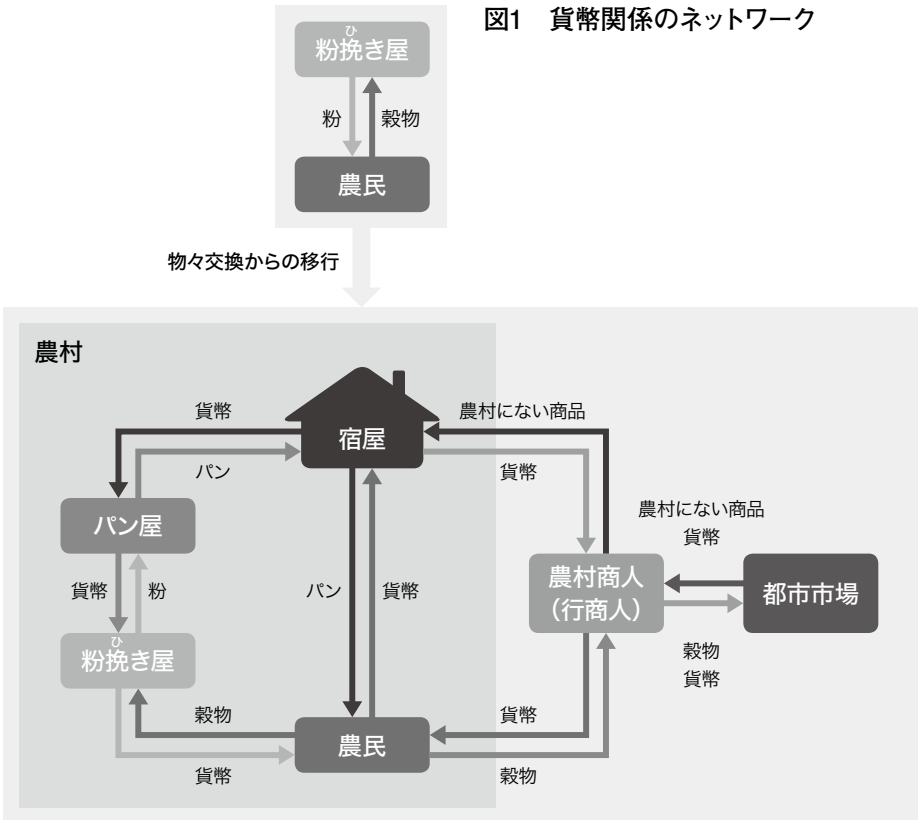
農村における貨幣経済の浸透

まず、商品・貨幣経済の初期段階は、都市内あるいは都市間を結ぶ街道沿いの宿駅で貨幣が使用される程度である。農村は自給自足と物々交換の世界に生きている。しかし農民が貨幣と全く無関係であったわけではない。彼らに余剰生産物があれば、それを都市市場へ持っていき貨幣を手に入れることができる。さらに手に入れた貨幣を使って都市市場で買い物することもできよう。しかし農村に戻れば、貨幣は「不要」となる。近隣都市市場では価値があった貨幣は、農村内では完全に価値を失う。農村に貨幣関係のネットワークが成立・浸透していないからである。農村内にまで貨幣関係のネットワークが浸透した社会は、単に農民が近郊の市場で時折貨幣を使用するといった程度のものではない。農村で「皆が日用生活必需品を貨幣で交換するようになった段階」である。

農村の宿屋は雑貨店

農村における貨幣関係のネットワーク作りに宿屋が一役買っている。農村の宿屋は、農民が日用生活必需品を購入する場であった。いわば雑貨店である。一六～一八世紀の過程で、ヨーロッパの農村の宿屋では、ビール、ブランデー、パイプ、たばこ、パン、食料品、穀物、タール（黒油）、鯨油（灯りに使う）、石鹸（せっけん）、シャベル、犂（すき）、鉄製・鋼鉄製器具、家畜、木材など諸々の日用品を販売するようになっていく。そこで農民は必要な日用生活必需品を貨幣で入手した。

図1　貨幣関係のネットワーク



登場の経緯

宿屋＝雑貨店の登場の経緯はこうである。例えば、農民は穀物を粉挽き屋に持っていき、次に挽いてもらった粉をパン屋で焼いてもらって食料としていたとしよう。それがパンを宿屋が売るようになる。農民は宿屋でパンを買う。粉挽き屋は粉をパン屋に売る。パン屋は焼いたパンを宿屋に売る（あるいは宿屋がパンを焼く）。農民の穀物は、一部は農村の粉挽き屋に売り、一部は農村商人（行商人）に売られ、農村商人は都市市場でそれを販売し、貨幣を農村にもたらす。また農村商人は、宿屋に、その農村にない商品を持ち込む。これは一例にすぎない。また、領主の規制があるので、このように図式的（**5ページ図1**）にもいかないが（ここが身分制的規制の廃棄された一九世紀以降と違う）、こうして宿屋＝雑貨店を中心に貨幣関係のネットワークが農村中に浸透する。

宿屋が貨幣関係のネットワークの中心に

聖俗の棲み分けの影響で、一六世紀以降は宿屋＝雑貨店が農村にまで成立する。教区教会のあった中心村には必ず存在するようになった。一七世紀以降には、中心村のみならず枝村にも宿屋＝雑貨店が成立していった。こうして、一八世紀になると、辺境の農村部に至るまで、貨幣関係のネットワークが浸透していくこととなる。また一六世紀以降、こういった農村の宿屋＝雑貨店の風景は絵に多く描かれるようになった。挿入絵は、ヒエロニムス・ボス（一四五〇ころ～一五一六年）という絵描きによるものである（**図版2**）。

農村の宿屋＝雑貨店は、在地のマーケット、金貸し、両替の機能を持ち、一八世紀後半までには辺境の農村（辺境の枝村）にまで広がった。現在でいえば「スーパーマーケット」と銀行を兼ね備えたような存在である。木材まで売るなら「ホームセンター」といってもよい。農村部に「スーパーマーケット」ができた文明はヨーロッパだけであった。宿屋＝雑貨店の広がりは、農村での貨幣関係のネットワークの浸透を強力に促進した。

図版2　農村の宿屋から出立する行商人。ボスの意図は不明。16世紀の知識人によって悪の巣窟と非難された宿屋を代弁したものか。行商人は当時乞食と同一視される場合もあった。彼を巡礼者ととらえるキリスト教的解釈も成り立つ。
H. Bosch,1510? Courtesy Museum Boijmans Van Beuningen,Rotterdam.

これからの旅館・ホテル

こうして、ヨーロッパ文明の最大の所産である資本主義の成立には宿屋の存在が少なからずあった。時代が移るにつれて、「貨幣関係のネットワーク」の中心的存在であった宿屋から、物流機能や金融機能などが失われていった。現在、宿屋つまり旅館やホテルは、まさに自分の作り出したシステムに翻弄されていることになるが、逆に、本来持っていた宿屋の「多機能性」を回復するのも一つの戦略かもしれない。

（しもだ　じゅん）

（注1）エール（ａｌｅ）は上面発酵させるイギリスのビールで、もともとはホップを入れなかった。

（注2）トリエント公会議は一五四五～六三年に断続的に開かれ、ルター主義を批判し教皇権の強化などを確認した。

下田淳（しもだ　じゅん）
一九六〇年埼玉県生まれ。歴史家。博士（歴史学）。現在、宇都宮大学教授。著書に『ドイツ近世の聖性と権力』、『歴史学「外」論』（以上青木書店）、『ドイツの民衆文化』（昭和堂）、『居酒屋の世界史』（講談社現代新書）など。